

平成26年度 「特色ある学校づくり対策事業」実践事例

佐世保市立早岐中学校

Haiki junior high school

所在地 〒859-3203 長崎県佐世保市陣の内町100番地

校長 立木 辰男

生徒数 738名

学級数 23学級

教育目標：我が早岐を誇りに思う
生徒の育成
校 訓：友愛 創造 健康



1 はじめに

「我が早岐を誇りに思う生徒の育成」これが本校の教育目標である。自分を育む地域や人々を愛し、その地域や人々から愛されている自分を感じることは、これから社会を支える大人へと成長していく生徒達の大きな糧となるはずである。

738人を数える生徒たちは素朴で素直である。また、体育大会や文化発表会などの行事では、大集団で競い合うことでさらなる高峰を目指す意欲に満ちた生徒達である。

P T Aはもとより地域の教育への関心は高く、青少年健全育成協議会をはじめとする諸団体からの支援、行政施策面からの支援など、地域一丸となって早岐地区の将来を担う生徒達の成長を支えてくださっている。

このような環境の中で、本市の「特色ある学校づくり対策事業」を有効に活用することにより、本校の教育目標の具現化に努めると同時に、地域・家庭との連携をさらに深めていきたいと考えている。



青少年健全育成協議会主催「ふれあいコンサート」(本校吹奏楽部も出演)

2 テーマ

我が早岐を誇りに思う生徒の育成

3 事業の目的

早岐...「は」・「い」・「き」という三つの文字を使って、わかりやすく具体的な学校像を次のように表現している。

具体的な学校像

「は」...花と緑に囲まれた学校

「い」...生き生きと活動する学校

「き」...気持ちよい挨拶をかわす学校

「我が早岐を誇りに思う生徒の育成」という目標の具現化のために、特に「い...生き生きと活動する学校」づくり、および、「き...気持ちよい挨拶をかわす学校」づくりを、本事業の中心的な取り組みとして推進していくこととした。

また、保護者・地域へ積極的に広報活動を行うとともに、連携して学校教育を推進し、学校・家庭・地域が手を取り合って、未来を担う早岐の子どもたちを育てる。そのためには、子ども達の学力を向上させることが大きな課題であり、本事業を推進する中で、様々な取組を行うこととした。

4 実践内容

(1) 学力の育成に向けて

A 授業改善の取組

平成23年度から2年間、「確かな学力の定着をめざした授業の創造」～教科のチーム力を活かした授業力向上～をテーマに授業改善研究に取り組み、平成24年11月に研究発表会を行った。平成25年度は、それまでの研究を継続しながら、さらに充実・深化させ、授業力向上を目指すこととした。本年度も引き続き授業力向上に取り組み、教師の授業づくりの技量をレベルアップし、ひいては生徒の学力向上を目指していくこととした。

具体的な取組

授業に「グループでの学習(協同的な学び)」を取り入れることで、他者との関わりを大切にしたい、より質の高い学びをめざす。このことが、言語環境の充実にもつながり、生徒の思考力、判断力、表現力等を育み、良好な人間関係を構築する。そのことが、分かる授業、ワクワクする授業につながると考えた。

内容・方法

基本的には平成25年度の手法を引き継ぐこととした。

1時間の授業の中に、<活動する場面>(思考を伴う活動、学んだことを使う活動、作業的な活動)や<協同する場面>(小グループで例えば男女混合の4人グループやペアでの活動を取り入れた授業、<表現を共有する場面>(生徒の発言が交流し班やグループ学級で共有される授業)等を行うことで、他者との関わりを重視し、より質の高い学びをめざした。本年度も、校内での研究授業を中心に次のような取組を柱に研修を進めた。

授業デザイン

指導案の代わりに「早岐中授業デザイン」を準備する。また、授業デザインには必ず座

席表を添付することとした。

授業の視点

授業の良し悪しや上手・下手を論じるのではなく、子どもの学びに目を向けて研究を行う。



「どう教えるべきだったか」ではなく、「子どもがどこで学んでいたのか」、「子どもがどこでつまづいていたのか」という事実を焦点化した話し合いを行う。その授業を参観する中から自分が「学んだこと」を述べ、多様な見方をお互いが交流して学び合う。授業研究の参加者は必ず一言は発言することとした。

スーパーバイザー及びアドバイザー招致による授業研究の充実と深化

本年度も下記のとおり、学びの共同体事務局はじめ各大学教育大学院から、スーパーバイザーおよびアドバイザーを招致し、全体研修会を3回、

各学年単位での研修会を3回行った。また、教科単位の授業研究会も実施した。



継続して、子

この字型座席から班活動へ...
授業を参観する稲葉義治先生(学びの共同体事務局長 写真左上)

どもの学びという視点から授業を検証していただいている。また、学校にいながら最新の教育情報を教授していただくことができ、職員にとっても貴重な学びの機会となっている。

B その他の学力育成に向けた取組 命や性の教室・メディア教室・

科学者招致による理科教育など

授業以外でも、専門的で最新の情報をもとに、学び、考え、刺激を受けさせたい。その



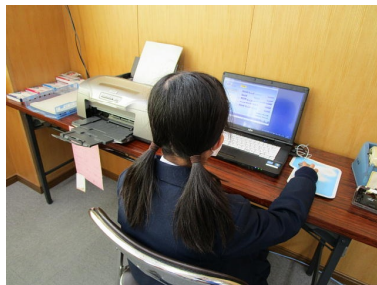
命の講演会「あずさからのメッセージ」是松いずみ先生

ために、「その道のスペシャリスト」を招致し、授業や講演をしていただく機会を積極的に設定した。講師は、助産師・全国で

命に関わる授業を展開している教師・命を中心に据えた性教育を展開している助産師・県メディア指導員・京都大学や長崎大学の科学系学部の教授（環境・エネルギー）等、まさしく「その道のスペシャリスト」ばかりである。授業や講演会では、ふだん学校では体験したり聞くことができない内容や手法が飛び出し、興味津々の面持ちで、講師の世界へ引き込まれていく生徒も多かった。生徒の感想からも、真剣に考え、多くのことを学び、刺激を受けたことが読み取れた。

自学プリント作成サイトの利用

5教科のプリントづくりをアシストするシステムを本年度から通年を通して導入した。各学年・各教科の目的に合わせたプ



生徒が課題に合わせて、自分でプリントを作成

プリントづくりが容易にでき、プリントには「早岐中学校」の文字が自動的に印刷される。教科担任によっては授業の復習プリントや家庭学習プリントとして利用している。また、家庭学習の課題として利用している学年もある。心の教室（ステップルーム）の生徒も、学級の時間割に準じて自分で自習課題を作成することで、自主的な学習に取り組みやすくなった。

学習室の整備

中庭にあるプレハブ倉庫の内装に手を加え、新しく学習室とした。（夜間はPTA等の活動室となる。）教室に入ることが難しい生徒が、その状況に応じて利用できる場所の選択肢が増えた。また、今後は受検前の自習室とするなど、学力向上のための部屋として積極的に利用を進めていきたい。

（2）職場体験学習

子どもたちには自立し、社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現するための力が求められている。そのためにキャリア教育の重要性はますます増している。本校では、「職場体験学習」を第2学年において3日間実施している。校区内外の各事業所で、子どもたちの生き生きと活動する姿が地域の大きな話題となっている。受入れをしていただく事業所には毎回全面的な協力・支援をいただいております。子どもたちにとっては、事前学習・体験・事後学習まで、「働く自分の姿」を強く意識し、働くことの意義を深く考える学習となった。

（3）学校オリジナルカレンダーの作成

本校独自に「学校カレンダー」を作成し、年度当初に各家庭及び地域関係機関者・関係者に配布している。「1年間の予定がわかり、学校行事に参加できるようになった」という声を聞くことができ、好評を得ている。また、子どもたちの1年間の学校生活の様子が分かるように写真（普段の学校生活及び部活動の様子を撮影したものであり、掲載にあたっては、本人・及び保護者の同意を得たもの）を掲載していることも大いに評価されている。この学校オリジナルカレンダーにより、年間の見通しを持って学校や行事と関わっていくことが可能となり、本校教育活動への協力促進の面で大きな効果があった。

(4) 本校の一徳運動の取組

～あいさつ運動の推進～



本校は、「お先にあいさつ運動」「あいさつに一声運動」と短いセンテンスで、一徳運動の中心

にあいさつの励行を示し、指導や生徒会の取組を続けている。生徒会を中心とした登校時のあいさつ運動や、PTAによる月初めのあいさつ運動を継続して行うことで、校内のあいさつの声はよく響いている。一方で、校外のあいさつについては努力が必要との声も聞こえていた。そこで、目に見える形であいさつ運動を意識できるように、昨年度は国道沿いのフェンスに横断幕を設置した。今年度は、更にシンボリックな意味合いを強くする目的から、横幅6mもの大きな横断幕を作製し、設置し直した。

(5) 生徒会の活性化

元気のある学校づくりには、自主的な生徒会活動が必要である。本校では毎年、生徒会役員が中心となり「生徒会スローガン」を決め、横断幕を作成している。「さらなる挑戦～未来へ向かって今を越える～」が、今年度の生徒会スローガンである。横断幕は体育館ギャラリーに掲示し、生徒集会等でも全生徒の目に入るようにしている。また、体育大会等の主要行事で共通テーマとして掲げ、年間を通して生徒一丸となってスローガンを意識した活動を行っている。

朝のあいさつ運動やボランティア活動等、生徒会執行部のリーダーシップのもと、各活動が活発に行われている。

5 終わりに

授業改善の取組では、昨年度から学識者を招致し、研究授業と授業研究会を通して継続的な指導を行っていただいている。また、全国の先進校へ職員を派遣し、生きた情報に接する機会を増やし、それぞれのノウハウや思いを吸収させ、協同的な学びに関わる情報の共有化を図っている。研修を積み重ねる中で、着実に授業改善が進んでいる。

本年度の子どもたちの活躍を振り返ると、昨年に引き続き、複数の運動部や個人が県大会・九州大会・全国大会・がんばらんば国体へ出場し輝かしい成果をおさめた。文化面でも、吹奏楽部の2年連続の県大会出場や、演劇部の2年連続の県中文祭ステージでの発表、技術工作部のロボコン全国大会初出場など、それぞれの部が特色を生かし、昨年よりも活動のレベルを上げることができた。

また、本校のオリジナルよさこい『伝舞』の取組は、団結力を育むと同時に愛校心を高める大きな効果がある。昨年度まで本事業を利用して揃えてきた法被や鳴子を使って、今年度の体育大会でも踊りを披露することができた。校歌をアレンジしたオリジナルの音楽にのせて、躍動する生徒達の姿は地域に元気を与えることができたものとする。

今後も、本校の特色ある取組を通して、『我が早岐を誇りに思う生徒の育成』という教育目標の具現化を推進し、併せて、確かな学力の定着に向けた取組を進めていきたい。



たくさんの生徒達の入学と卒業を見守ってきた早岐中自慢の桜並木